

南多摩納税貯蓄組合連合会優秀賞

国立科学博物館と税の未来

多摩市立諏訪中学校

三学年 田中 亮輔

先日、数年ぶりに家族で国立科学博物館に行った。期間限定の特別展では、とてもユニークで細やか、興味深い昆虫マニアックという展示が行われていた。そして、常設展示の地球館に、はやる気持ちで足を運んだ。古代の地球で大地を駆け回り、大空を飛び回っていたであろう恐竜たちの骨格模型が私たちを待ち構えるような臨場感をもって展示されていた。幼い頃とは異なる視点で、表皮や鳴き声轟きなどを想像しながら見て回った。

上野にある国立科学博物館は、地球の成り立ちや自然に関する動植物の標本、鉱物のし資料など五百万点以上を保管する国立での唯一の総合科学博物館だ。それらの保管には厳しい温度や湿度の管理が必要となる。また、バックヤードでは多くの研究者が自然史や化学技術に関する研究を行っている。そんな国立科学博物館は、独立行政法人として管理運営されており、年間の運営費は約三十五億五千万かかるそうだ。大学生以上から発生する入場料やグッズなどの収入と運営費ときと公的な交付金から成り立っている。

一方海外はどうだろう。イギリスの大英博物館、アメリカのスミソニアン博物館の入場料は無料。そんな著名な博物館に追い付け追い越せの国立科学博物館だが、昨年は光熱費が高騰し、コロナ禍で来館者の減少も重なり、資金を集めるために寄付を募るクラウド

ファンディングを行ったとインターネット記事で見かけた。三ヶ月という期間で総額九億円を超える資金が支援者約五万六千人によって集まった。これは金額、人数ともに国内の最高記録を更新したとのこと。人々の注目と関心の高さの表れだろう。驚くべき数字だと思う。

幼い子供から大人まで、知的好奇心を刺激する博物館は、生きている地球の足跡であり未来そのものであると考える。その国立科学博物館への公的な交付金は、税金が投入されていると言い換えられる。単に施設を現状維持するためだけではなく、科学技術や自然史に関する知識を広め、教育活動を支援し、社会全体に貢献するためである。特に、次世代の科学者や技術者を育てるための教育環境を整えることは、直近とその先の日本の発展に直結していると思う。税金の投入によって、国立科学博物館は運営が可能となり、誰もがアクセスしやすい施設として広く一般市民に開かれた場となっている。国立科学博物館が発展しながら存続するため、永続的な税金の投入が出来る日本であって欲しいと願いつつ自分が大人になったら、しっかり納税できる社会人になり、国立科学博物館を支える側になりたいと思う。